「入れるべきところへ突っ込まれた言葉」

――教科書批判の根拠――

上野昂志

この半年、私はまた多くの血
と多くの涙をみた、
だが私には雑感あるのみ。

涙はぬぐわれた、血は消えた、
殺人者どもはぶらりぶらりと、
鋼い刀をつかい、軟い刀（ペ
ンの意）をつかう。
だが私にはただ「雑感」ある
のみ。

「雑感」さえも「入れるべき
ところへ突っ込んでしま」わ
れたら、
私にはもうただ「のみ」ある
のみ！

（魯迅『而已集』題辞）

「雑感あるのみ」から「雑感」を差し引いたら「のみ」しか残らない、そこで自分の雑感集を「のみ＝而已」集と名づけると、魯迅は言うのである。ここで行なわれている操作は単なる引き算にも見えるが、しかし決して、5－3＝2というような明々白々、すっきりと確実な計算ではない。私たちの前に残された「而已」という言葉は不気味である。「のみ」という解答に至る計算の仕掛、即ち論理の運動は明白とは言い難い。無論、ひとつながりで意味をもつ言葉からその一部分をとってしまって、それだけでは意味をなさない言葉を残すというやり方は、格別目新しいものではない。落語や万才などでもギャグとしてよく使われるだろう。魯迅の言葉の操作もそれに似ている。だが違う。

「入れるべきところへ突っこんでしまう」は、彼の論敵の一人が「魯迅先生は、筆をとれば人を罪に陥れようとする。………だが彼の文章は、私は見てしまったらすぐに入れるべきところへ突っ込んでしまう」と書いたところからでてきているのである。敵の言葉を早速使うのは魯迅の得意とするところだが、この「入れるべきところへ突っこんでしまう」は当時の中国においてはレトリックに止まらない有効性を持っていた。即ち、「鋼い刀」の存在である。

一九二六年三月十八日、段祺瑞政府は国務院の前に徒手で請願に来た青年男女を包囲して虐殺した。その数は数百人にのぼったといわれる。そして「軟い刀」は彼らを称して「暴徒」といった。前記の言葉は同じ年の十月十四日に書かれたものであるが、一九二七年の「雑感」をまとめた時に題辞として使われた。この年の四月には、蒋介石の有名な血の粛清が行なわれている。「鋼い刀」の横行は三・一八の比ではない、情況は文字通り「のみ」しか残さなくなっていたのである。

「のみ」という言葉しかないというのは、その上に連らなっていた様々の言葉が奪われてしまったという情況をあらわにしているが、「私にはもうただ『のみ』あるのみ！」という表現をとる時、それは単なる情況の叙述を超えている。それ一語では意味機能を果たさない言葉が、強いられた沈黙をもって情況に対峙する。一切の言葉を奪いと

ってしまう敵の「軟い刀」の横行に対して、奪われた言葉の空白をもって打つ。それは、何もないところの空白ではなく、奪われた言葉の痕跡も生々しい空白である。「のみ」は確かに書かれた言葉の存在を、その非在において表現しているのだ。そしてその空白は、言葉を奪いとり撒き散らす「軟い刀」の使い手どもの空虚を一挙にあばきだすのである。

「ひとつの新しい商品を生産するものは、それに命名する。そして商品の生産が違法でない以上、それに命名することにどんな規制が及ぶわけでもない。〈歓（よろこび）〉をくださいといっても、一台のカラー・テレビいがいのなにを買うこともできないのである。〈シトロン、シトロン、メロンの香り、カスガイ・シトロンソーダ〉なるCMソングがある。シトロン（レモン）とメロンとの強引な同一化といえども、そこに商品があり、それをそのように指示するラジオやTVのコマーシャルがあれば、命名と意味づけははたされる——メロンの香りのレモンであっても、下痢はしないというわけだ。」

（菅谷規矩雄「アドレセンスの証明」現代詩手帖2月号）

確かに菅谷が指摘するように、生産のシステムを支配するものは、意味の領域をも支配するだろう。「歓びだあ」という言葉が、たとえ「よろこび」の感情を表わすためにだけ発せられたとしても、〈歓〉というテレビ受像器の出現によって、その言葉は一個の商品に短絡させられてしまう。現に〈歓〉のコマーシャルはこの二重性を利用することによって成り立っている。つまり、〈歓〉の出現以来、「歓び」の感情は物につきまとわれている。もはや「歓び」の感情をそのまま表わす言葉は奪われてしまったのである。

ところで、この関係をもう少し押し進めてみればすぐわかることだが、一切の暴力を法秩序の体系において独占する国家は、言葉の意味領域をも独占しつくそうとする。「暴徒」、「武器」、「良識」、「秩序」等々マスコミを通じて流される言葉には全て国家の独特の意味づけがなされている。それらの言葉の独特の意味が私たちの生活内部に浸透するにつれて、私たちの言葉は貧寒にならざるを得ない。即ち、言葉の意味領域において、私たちは国家に収束されていくのである。この操作をもっとも組織立って行なうところに教育行政がある。

家永訴訟で露呈された教科書検定、灘尾文相の登場と共にクローズアップされた「国防教育」、中学教育課程の改定の中間報告にあらわれた「公民教育」、更にこの四月から小学校で使われる教育出版の「新訂標準国語」の6年・下に戦後初めて登場した自衛隊などは、現実の情況の函数として位置づけていかねばならないのは当然のことだが、しかし、それらの教科書が、もし教育の現場で有効性（無論国家にとって）を発揮するとすれば、それはその言語表現においてであることを忘れてはならない。「愛国心」、「自衛隊」、「国民的自覚」というような言葉に対して、ただ憲法や平和を対置してみても効果ある批判とならないのは目に見えている。政府や文部省自体、これらの言葉は憲法のワク内で使っているのだと居直っているのだから。

（3月22日朝日新聞夕刊）

これに対しては教科書の文脈の中で、国家の言葉に対する意味づけをひとつひとつ暴露していくことから出発する他はない。その時、魯迅における表現が示唆するものは大きいのではあるまいか。

（68年3月25日）

読者サロン

イラスト：SHIGEUO-MASAI

似而非者横行せるを歎く

小山一行（東京）

世に言へる「ひやうろん家」に二様あり。一は言ふべきにもあらねど、つぎの様をあらはすに便なれば、あへて述べむとす。すなはち、大和の文の学のうへに、文の学たる批評をば初めて著はせし、小林翁のごときをいふなり。翁のいはく、「批評とは作品の中に己の懐疑を語ることなり。」（「様々なる意匠」より筆者覚え記す）己の生くる道に心触れたるものあらば、先づそのものに己を虚しうして没入し、そのものの主調低音より湧き出づるものに耳傾け、そこに己の影を見たればすなはちこれを著す。ここにありては、批評はひとり批評にのみあらず、おのが文の学となれり。すなはち記せし人の作品なり。さればかの翁の、「批評こそ文の学なれ。」と言へるもまた然りとのみおぼゆ。

しかるに、今、ことざまなる「ひやうろん家」あり。先に述べしことどもに堪だたがへること多し。そはいたづらにものを読みてはよろし、悪し、など言ひ放ちてすなはちこと足れりとするがごときものどもをいふなり。あるひは、ここにあらはれし思惟は存在と非存在との谷間を云々……など、ひとへにむづかしき言の葉を用ゐて、さも己のさかしきさまを見せむとするやからをいふなり。あまたの道にかくのごとき似而非者多かれど、「漫ろ画」の道にては事さらなり。

枕の小納言の言へるがごとく、なまもののさも知りたらむやうにものしたるはいと憎し。己のなま学びをばふりかざしつ、こは悪し、こはわろし、などことごとに言ひ去るはかたはらいたし。この類は、いはゆる「似而非ひやうろん家」なれば、「漫ろ画」描ける人も、その言の葉の耳傾くるにおよばざることを知りて、意にもかけず笑ひすてつゝ、ひとへに己の道にいそしめり。

いかなる心や持ちたりけむ、ひとりたかぶりておちこちの草紙によしなき文を書き記し、多くの人に笑はれつるを知らず、なほもそのあやしき業を止めざる者、あはれといふも、なかなかおろかなり。

（原文のまま）

「ガロ」4月号感想

山崎　順（京都・20歳）

「ガロ」の読者諸氏に申し上げたい。ことに本欄に投書をなさっておられる〝批評家〟の方々に申し上げたい。読者サロンも欠かさず読ませていただいているが、どうも難解な語句の氾濫が眼にあまる。いや、眼にあまるのはともかくとして、理解出来ないのは困る。われわれは、もっと日常的な会話的な言葉の範囲内で十分「ガロ」を批評し合えるのではないか？　より多くの読者に自分の見方、考え方をより正確に伝えてこそ、初めて投書も読者サロンも本来の意味を持つというものだ。

「ガロ」の編集者の方は後まわしでかまわないのである。なぜなら「ガロ」を育てていくのは、われわれ読者に他ならないから。

投書の多くは、紋切形哲学用語のたくみな構成のみに終始して、いささかの仕上がりぐあいに大層な自負と自己満足をあらわにしている。その白々しいまでの厚顔ぶりと、その公式的な思考の貧弱なこととときたら、まるでアジビラか教条主義者のお題目ではないか。おそらく、筆者自身だって無理な言葉を食べすぎて消化不良をおこしてるのじゃないかな。

「ガロ」4月号、あれはひどかった。池上遼一氏の「風太郎」は前回もつまらなかったが、今回もまたつまらない。ブルドーザーでまかり通るようなストーリーの展開は、押しつけがましいにもほどがある。林静一氏の「吾が母は」はさっぱりわけがわからん。あれが前衛漫画というもので、とりもなおさず描いた林氏は前衛作家となるのだろうが、あの作品を見る限りにおいては、前衛とはとにかくわけのわからないものとなるらしい。

しかし、自慢じゃないが、あの程度だったら私にもかけそうだ。原稿料をもらっている以上、わけのわからぬ退屈なものだけではすまされまい。

入選作品「太陽の詩」、タイトルから大仰にふりかざしたが、内容がついていけず、浮き足だっている。すでにあの感覚は十年前のものだ。セリフも陳腐、それを作者は、はじめから終りまで、大げさにわめき散らしていささかも赤面することもなく、したり顔でとくとくとしている。無知もはなはだしい。

滝田ゆう氏の作品はいつ見ても愉快だ。しかも賢明なことに、真綿につつんだキリを隠しもっていて、ちょっぴりそこはかとなくペーソスを感じさせる。あれらの作中のすべての人物に、まるで隣人であるかのような親近感を覚えるし、悪人が一人も登場してこないのに、彼ら善人たちがおりなす人間模様はあいまいな、やるせない哀切にふちどられている。なぜだろう？　直接には登場してはこないが、悪い奴は彼らのはまりこんだ社会であるらしい。

氏の1月号掲載の「長い道」の、うだつのあがらない浪人の勝気な妻の顔が忘れられない。最後のカットの車を引く妻の顔といったら「こんなもんなのよ、ざまあみやがれ」なんてつぶや

きが聞えてくる。あれを見たら、おそらく仁王様だって思わずニヤリとなさるにちがいない。5月号の作品を期待しています。

「ガロ」の魅力とは

藤田秀典（東京・20歳）

大衆は三流品は好まないが、一流品も好まない。二流品を好む。芸術においても然り。「ガロ」は、数多い漫画雑誌の中でも唯一の面白い雑誌であり、しかもすぐれた芸術性を誇っている。（最近、特によくなってきた）つまり、芸術の一流品である。その「ガロ」を愛読している読者に対し、そのすぐれた感覚に敬意は表するが、疑問も抱かざるを得ない。つまり、本当に「ガロ」を理解しているのかと、4月号の読者サロンを読んでつくづくそう感じた。

「ガロ」の魅力とは、するどい政治風刺の林静一であり、ファンタスティックな佐々木マキ、残酷な笑いを要求する滝田ゆう、それに随筆風漫画のつげ義春である。白土三平や水木しげるではない。この二人は、以前はともかく、最近のは実につまらない。仕事の量が多すぎるからではないだろうか。

しかし、「ガロ」にも欠点はある。勝又進はともかくとして、いちいち例はあげないが、他の作家は概してぜんぜんだめだということである。それから「日本忍法伝」や「目安箱」も「ガロ」には無意味に思える。最後に、永島慎二はどうしたのであろうか。「かかしがきいたカエルの話」は素晴しかったのに。

反論・反駁・皮肉・嫌味

羽田三郎（神奈川）

〈おもしろい「ガロ」には、つまらない「イヤミ」などを「クサリ」〉

（一）「カムイ伝」の低調　（二）水木しげるがヌケガラに（某氏のように「昔のマンガのリバイバルを」などと暢気なことをいっている場合ではないのである）。（三）つげ義春、永島慎二等の想像力の貧弱さ。（四）つりたくにこのコマの無駄遣い。

今頃「カムイ伝」をケナしている輩は、「ガロの世界」掲載の「構想のマンネリ化・白土三平論」（津守久志）でも読め。くだらぬ随筆マンガなどは〈「ガロ」に載せるのは止めにして〉旅行雑誌にでも載せたらどうだ。僕は、滝田氏の大不安です。とくに氏には3・4月号のようなナンセンス・ギャグものを沢山かいてほしい。「アンリとアンヌのバラード」は「天国で見る夢」とともに氏独特のムードがあってたのしかった。

〈ナンセンスな「評論」にはナンセンスな「ヒニク」を〉

3月号の単純明快マンガ否定者へ。氏の指摘したような支離滅裂な現代だからこそ「むずかしいことはいわなくても（むずかしい表現をしなくても）、私たちの目から飛びこんでリアル平易に語ってくれるマンガ」が必要なのだ。

また石子氏が云う所の反マンガ（頭を使わねば理解できぬ）もよいが、最近の"つげマンガ"のような、単純明快（内容か）、ドラマティック（でなく）ヒューマニスティック（安っぽい）、無味乾燥、な"反マンガ"じゃあどうしようもない。

一人でいきがっている東京の某氏へ。つげ義春が独自（ひとりよがり）な分析（ほんの一部の把握とほんの思いつき）で描いた作品故に、石子氏は、独自な分析で論じ（なければならなかっ）たのである。

「独善的な考えや独自の分析でしか、物事をなす（かく）ことができない」のが人間である。賢明な読者諸氏（つげ氏も石子氏も）は、氏の幼稚で独り善がりなくだらぬグチをよんで、さぞ苦笑していることだろう。読者諸氏の顔々が目に浮かぶようだ。（文中「ゴヒイキ」は「エコヒイキ」の誤りか？）

誰か「評論をかくこと」を偉く難しいことのようにいっておったが、評論なんてものは、「自分の感じたことや思ったことをそのままかけばよい」ものなのであり、（バカを除けば）誰にでもかけるものなのである。だから、平等精神（？）に則ってかいたものは評論ではなく、無味乾燥な解説でしかなく、それをかいた奴は評論家でなく解説家だ。

〈イキゴム漫画家タチへ〉

某氏「生死考」、某氏「青春考」、某氏「想像力の無い読者へ挑戦」、某新人「息子にみせられる人生漫画をかく」、某新人「ハイティーンの悩みを知りかく」―そんな悩みなどは、「何とかコンサルタント」とか深沢七郎の「人間何とか人生案内」にでも任せておけばよいのではないか？　ほかに描くことはないか？　これもみな、某漫画家「権力による差別政策の本質を明らかにする」の好影響（？）であろうか。

つげ作品のあわれみ

金子大二郎（東京）

つげ義春氏の作品は抒情性を基盤として、人間味あふれる物の見方・考え方をもって構成されている。だから作品中別に作品の感動を盛りあげている訳でもないのに、流れるようにして読者の心に響いてくる。特に最後の三コマくらいは、作品をまとめる意味にしても、要約した主人公(作者)の見方「あわれみ」が読者に迫ってくると共に、余韻が感じられるのではないだろうか。

白土氏の作品はかなり原色的でとげとげしいとすれば、つげ氏は寂びた味である。それは東洋的あるいは日本的な見方で、いわゆる禅のようにも感じられてくる。現代の文化・文明がヨーロッパ的な合理を中心としている今、僕はむしろ東洋的なものの発見に驚く。そういった意味でも氏の作品は格別の好作品と言えるのではないだろうか。

又作者(主人公)をかいていてもその風景、要するに余白は普通なら「主」に対して「従」すべきなのにつげ氏は同率をもって描いている。これは初めのうち作品の動きを止めるようにも感じてきたが、よく考えてみると、そうすることで深さを増し、さらに主人公と自然が同化することによって、内面的にも拡がってゆくように感ずる。

ともかく僕はガロの中においてつげ義春の存在は白土・水木を抜いてはっきりと幻の中から浮かびあがってきたように思われる。ガロの発展を期待し、マンガの認識を拡めるために頑張ってもらいたいと願います。